たなかみ山
第5号
発行
桐生民具クラブ

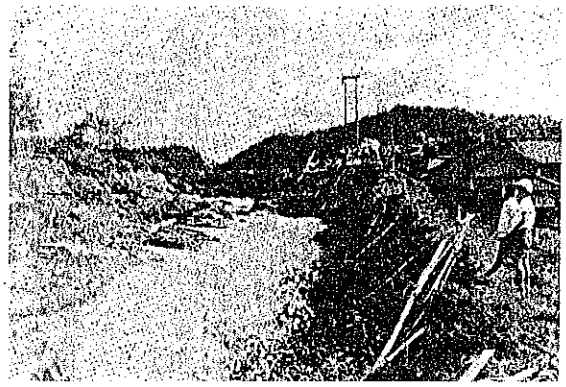
治山治水　千年のつけ

田上川が大戸川になっても大被害続出（中の一）

山本文良

田上川を源流とした野洲川・草津川・田上川・宮川。さらに天神川等の流域も毎年定期便のように襲ってくる台風や集中豪雨に悩まされ続けたのです。

記録によると、牧、平野は貞享・元録年間（一六八四～一七〇四）には度重なる堤防決壊、土砂流入のため水田は、埋没、排水不能、さらに地下水が上昇して邸地も湿地と化してしまいました。



萱尾川水害現場（平野）

このため、後ろの山手へ移住を余儀なくされたのです。

また、宝永四年（一七〇七）田上川の果てしなく続く天災や人災を未然に防ぐため、牧の奈良街道黒波の渡しから堂までの流路を人夫五千余を投入して大改修されました。

それまでは、現在の上田上支所の南を流れる「古川」を中心に入りくんで堂へ流れていたようです。

新川筋の完成を記念して「田上川」を「大戸川」と改められたのもこの時です。

村人の喜びも束の間。翌年（宝永五年）大戸川決壊。流域の中野、芝原六八戸流失。死者三名等が出たのです。

このため、中野、芝原も現在地へ移住を開始しました。

しかし、当時の膳所藩は、住宅の復興より水田の土砂除去を命じたとのことです。

さらに宝永六年。大洪水が芝原を襲い、堤防約二五〇間が破壊されています。

明けて宝永七年。牧木遣口堤防決壊。

鍬・鋤・モッコしかなかった時代に大戸川の流路変更や三年続きの大被害。家は流され田圃は土砂の下。着のみ着のまま。食べる米もない。それでも、一刻も復興の手を休むことのできなかった当時の人々のご苦労。おそらく想像を絶するものがあったことでしょう。

「死んだ方がましだ。」とは全くこのことで、この世の生地獄だったと思われます。

それから三〇年後の寛保元年（一七四一）牧・平野・中野・芝原・新免・桐生・岡本・馬場・部田の九村が、膳所藩より六ヶ所の新砂溜を命ぜられました。

これはおそらく、大戸川並びに草津川の堰堤作りだと推測されます。

ここで、初めて草津川が出てきますが、きっと被害が蓄積されて手をつけずにはいられなかったものと思われます。

その証拠は、九ヶ村の庄屋が草津宿の助郷免除を願い出ていることです。

大被害は、上流だけではなく下流の堂・新免も避けることはできなかったのです。

享和二年（一八〇二）大戸川堤防決壊により、堂二三戸のうち二〇戸流失。新免も古屋敷（田上中学校一帯）より高台へ移住を始め、現在の形になったのです。

嘉永元年（一八四八）中野は、集中豪雨のため背後の西山洲止め付近一帯に山津波が続出。萱尾川・梨の木川・明曽川・大塚川決壊。縄張垣（中野南部）付近は、水深一丈（三・三m）。家屋全壊九。牛四頭溺死等を出し、後に助郷（参勤交代の大名の荷物運び）が免除されています。

当時としては、助郷免除なんて許されることではなかったのです。

しかし、それが許されたということは、如何に大きな被害だったということになります。

寛政二年（一八五五）草津川は、今の桐生新橋付近で決壊。死者一名他一部高台へ移住開始という記録もあります。

こうした記録をたどると、大鳥居を除く七ヶ村は総べて水の大被害を受け、高台へ移住避難したのです。

それでも先人は、あらゆる苦しみに耐え生き抜いて、今日の基盤を築いて下さったのです。

しかし、住家は安定しても堤防決壊・田圃への土砂流入は、繰り返されて行きます。いや、そればかりではありません。

箭簳(やの)神社の歴史（上）

氏子総代　谷口定雄

私たちの祖先が「桐生」の地に住みついたのは、いつの時代か定かではありません。

しかし、氏神として今から五百余年の昔。尊崇奉仕の霊場として、現在地に勧請されました。

明治以前は「矢野大明神」と称して天児屋根命をお祀りしました。

社記によりますと、

○創建不詳

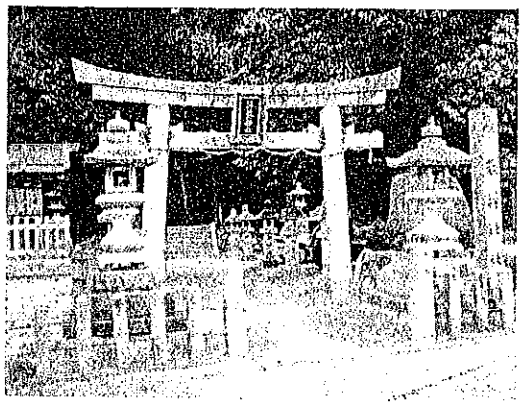
○京都吉田神社より勧請

○貞治三年（一三六四）社殿炎上

○貞治四年造営

棟札には、座衆刑部景弘以下十三名が記されています。

その他の古記にも



箭簳神社

○大永二年十月（一五二二）社殿造営。

○寛文十年三月（一六七〇）修理。

○元録十五年十一月（一七〇二）修理。

おそらくこの三項は、神社の拡張整備や大修復がなされたものと思われます。

また、明治の初め「箭簳神社」と改められ、明治九年には「村社」に列せられています。

さらに、明治四十四年十月（一九一一）社殿改修時には、明治四十二年度の伊勢神宮「式年遷宮」の古材下賜の記録もあります。

それから約八十年。再三再四の修造も永年の風雪により老朽化し、修造不可能となりました。

昭和五十四年自治会長を中心に氏子の皆さんのご賛同ご協力を得て、五十五年二月新本殿を竣工現在に至っています。

社蔵文

社伝曰、当社祭神者天児屋根命也、相伝往昔自洛東吉田神社勧請、依与吉田神社同一之祭神也、勧請年月雖不詳、貞治三年甲辰社殿炎焼　同四年乙巳三月六日造営、此時神主曰七良太夫、又有座衆主十三人、其後大永二年午十月廿八日造営、寛文十年三月、元録十五年十一月修理等、明千古記録、本社神徳之顕著也、古来所伝、有神託曰。為本社氏子者、不可移住他邦、宜永住此土云々、故本村人民之移住于他者皆不数年而復帰、即是不適神慮之所致也、是以本村住民逐年繁殖也、

他に棟札銘文等保存されています。

吉田神社は、京都市左京区吉田神楽岡町に鎮座し、祭神はタケミカズチノカミ・イワイヌシノミコト・アメノコヤネノミコト・ヒメガミであります。

平安時代の貞観年間に奈良の春日大社を勧請した藤原氏の氏神社で、朝廷の外威神としても尊敬されています。

室町時代中期に起こった「唯一神道」でも有名な神社です。

境内社には、

八幡社

祭神は応神天皇

武運長久、平和守護神

鎮座年代不詳

稲荷社

倉稲魂命(うかのみたまのみこと)

五穀豊穣、衣食住守護、諸業繁栄

水徳顕著で生命の神

鎮座年代不詳

天満宮

菅原道真（菅公）

学問の神

社伝によると、大正時代の初め災害(わざわい)発生のため村人不安の日夜をおくる。有志者赤野井天満宮より分神拝受。現山本岩蔵氏宅地に息災如意安全を願って社殿建立。

昭和四十三年九月本境内へ遷宮基礎、鳥居は、当時の石工谷口茂七氏の作です。

あいさつ

高木啓輔

「おはよう。」

って大きな声で言うと

むねがスカッとする。

「こんにちは。」

って言われると

うれしくなる

「おはよう。」

「こんにちは。」

なんて不思議な言葉なんだろう

いったいだれが

作ったのかな

きっと世界の友だちの

心の精が

作ったのだろう

この不思議な言葉で

人と人の心の輪が

広がるといいな

先人の知恵

捨てるところのない「藁」の利用

ふれあい村資料館　山本三郎

戦後三十年。世の中に本格的な平和が訪れ、科学の発達に伴ない各種の新しい生活用具が製造販売され使用されるようになりました。

安価・便利・軽量・美的感覚等が要求され、以前の生活用具は目に見えて消えて行きました。

日本には、日本の気候、風土にあった生活様式が先人の知恵によって確立されています。

つまり、生活文化の特徴と歴史があります。それが今、大きく転換しつつあります。

ここに至って学者の方々は勿論、一般の人びとも「民具」に対する関心が高まり、収集・調査・研究が進み、各地に資料館や博物館が建設されてきました。

学問的な追求と先人への感謝・報恩の精神がかん養されていることは本当にうれしいことであります。

前書きはさておき、私たちの先祖が残し伝えてくれた文化遺産は無限でありますが、昔から一つのもので利用度が多く「捨てるところがない」と言われるものに「豚」「鯨」があります。

つまり、皮は皮製品。毛は掃除用具。肉は食用。骨は工芸品や肥料。脂は洗剤等にと言うように。

まだあります。それは「稲藁」です。今日は、ここにピントを当ててみました。

一、利用した数はどれだけか……全体

二、現在では、どれだけ姿を消したか。

三、現在も、藁加工品として残っているものは何か。……

の三つに分けてみました。

民俗芸能――娯楽用、遊戯用、床飾

面――人形

玩具

宝船

笠類――蓑帽子　ゴザ帽子

日除簾

はきもの――草履　草鞋

藁沓

防寒用藁靴

藁の利用（みの・苗の梱包）

背負用運搬具――動物の床

雨具――背蓑　丸蓑　胴蓑

腰蓑

飯食用器――温袍

陶器格納具

弁当畚　円座

容器――米俵　畚　叺　畚

社会生活――莚　桶

釜（氷漏れを防ぐ編もの）

縄帚　畳中地

信仰――縄　神事祈餅

門松縄　篠俵　疱瘡（天然痘）

休憩所――屋根葺

胡坐

アングリ小屋

養蚕蓄産――蚕網　家畜の床　網

其の他――藁布団　藁手袋

以上お読みいただいて、如何に多種多様にわたって藁が使用され、大切な素材であったかがおわかりいただいたことと思います。

日々の生活に欠かすことのできない必需品であったからこそ、手間も時間も仕事の疲れも忘れて、朝は早くから夜おそくまでかかって作りあげ利用したのです。

例えば、野良仕事を終わった母親が子どもたちに手伝わせて、横槌で「藁打ち」します。

夕飯、後片づけがすむと休む暇もなく、夏なら外で、冬なら土間に莚を敷いて「草履作り」をされたのです。

思い出しますが、夏の星空を仰ぎ蚊に喰われないように子どもが側から「うちわ」であおいだり、「蚊くすべ」と云ってモロの木を燃やして煙を出します。蚊は、けむたくて逃げて行きます。

さらに、草履が履きやすく長持ちするように、木綿の細布を藁すべにまぜて編んでくれたのです。

今日のように、すべてが発達向上しプラスチックやステンレスの製品で、とても軽便なことは、本当にありがたくて幸せなことです。

しかし、現在も藁加工品として珍重されているものはありますが、この製造技術を保持される方は極めて限られてきました。

はずかしいことです。使い捨ての今の世の中。きっと、ご先祖の方々が私たちに「物を粗末にしてはいけない。」と警鐘を鳴らしていて下さるのかもわかりません。

本当に、先人の知恵とご苦労の数々は忘れてはならないと思います。

ただ、「藁」と言えばそれまでですが、収穫に至るまで一年の月日と大自然の恵みに基因するのであります。

先祖のおかげ。自然のあかげ。私たちは、その中に生きているのです。

金勝寺裏参道
北谷林道・落ケ滝・北峰縦走線（風）

山本文良

帝産湖南バスで、JR「石山」から約三十分。「草津」から約二十分で「上桐生」終点に着く。

ここから山に向かうとすぐ左側に駐車場が見えてくる。そこを通り越して山裾の広い道を田圃や溜池を見下しながら進む。

やがて、右手「落ケ滝線」への道標に従って細い林道に入る。

山田や溜池を前中景に、すばらしい景色が目に入って来る。

気を付けると二ヶ所にアングリ小屋の残がいの四本の石柱が、木の間がくれに見られる。

田上山より三上山遠望

ここから谷川に沿って、道は次第に小登りになる。雑木のトンネル、松の大木や松喰い虫にやられた伐木の丸太がまじって面白い。

また、時々「ウラジロ」の群生がありやさしく迎えてくれる。

何と言っても、このコースはヤング向きで険しいがすごく景色がバラエティにとんでいる。特に秋の紅葉時は最高です。

雑木のトンネルを過ぎると谷あいの道に変わり、谷川のせせらぎを見聞きしながら歩き続ける。

しかし、四～五ヶ所一瞬道がとぎれて岩場にさしかかることがある。

迷うことはない。岩のくぼみや矢印を探せばよい。

山あり谷あり上ったり下ったり、こんなことを繰り返しているうちに右手に禿山。左手に緑の鶏冠山が対象的に見えてくる。

一年を通じて、禿山には土砂の着物をはがされた大小様々の奇岩が目につき、子供連れならすぐ「キョンシーだ！」「スーパーターボロボだ！」と次々口にするでしょう。

何と言っても紅葉の山々と奇岩とのコントラストは日本一である。

さらに、山頂からの眺めもすばらしく東は、全国植樹祭あと地に甲西町一帯。西は、比叡山・大津の市街・近江大橋。南は、南郷・田上連峰。北は、栗東トレセン・三上山・びわ湖と一時間でも二時間でも眺めていたい程です。

茶沸観音を過ぎると尾根道ばかりで、殆ど高低がない。

八大竜王社を過ぎて下りかけると、右手に新しい砂防工事のあとが見られ、仕事のご苦労が偲ばれる。

金勝寺に近づくにつれて大木が増えてくる。

急に視界が開けて幅十mもあろうかと思われる道路に出る。

あっ出た！。と思ったら、目の前に金色のまばゆいお堂が見える。休憩がてらのぞいてみたが、中はからっぽ。

道の両側の大木はますます増え、「もみ」の大木も見えはじめ、いよいよ深山に来た感じが強まる。

「女人結界」「下乗」の石柱は、どうしたことか姿を消しているが、山入の里坊から点々と続いたと思われる「丁石」の最後の「一丁」が建っている。

めざす金勝寺。一風変わった石の階段。山門・本堂は、もうすぐそこ。

この間約八キロメートル。

ゲートボールもできない

湖北中河内探訪　山本文良

若者は職を奪われ
みんなみんな町へ出て行った
孫もいない村
じいちゃんばあちゃん　犬と猫

田んぼも山も荒れる一方
今年も雪が三メートル
命の綱は電話一本
火事が起きたらどうなるの

力なくして何ができる
あと十五年あと十年
もつかしらもつかしら
ゲートボールなんか
とてもとてもしている間がない

お礼

ご投稿、取材ご協力有難うございました。心からお礼申し上げます。

また、お読み下さった方がたよりお礼のことば、お電話、お便り、ご感想、激励等いただき本当にうれしく思っております。

尚、今後共よろしくお願い申し上げます。

桐生民具クラブ代表
山本文良㊾〇〇七七
有線五六七八